



Bーぐる沿線協議会ニュース

第10号

平成26年3月発行 Bーぐる沿線協議会事務局 区民課庶務係（コミュニティバス担当） 03-5803-1387

Bーぐるに関する区民アンケート結果の概要がまとまりました

平成26年3月19日に沿線協議会が開催され、昨年10月に実施した「Bーぐるに関する区民アンケート」結果の概要報告がありました。ここでは、その一部をご紹介します。

■区民の5割以上がBーぐるを利用しています

Bーぐるの利用頻度は、週に1回以上利用している人の割合が11.0%で、「月に1回程度」・「年に数回程度」があわせて39.5%となっています。ふだん利用していない人（「ほとんど利用しない」+「利用したことはない」）は49.5%で、前回調査の66.8

%から約17ポイント減少しており、千駄木・駒込ルートの利用者の定着や目白台・小日向ルートの運行開始などにより、全体的にBーぐるを利用する人の割合が増加しています（図1）。

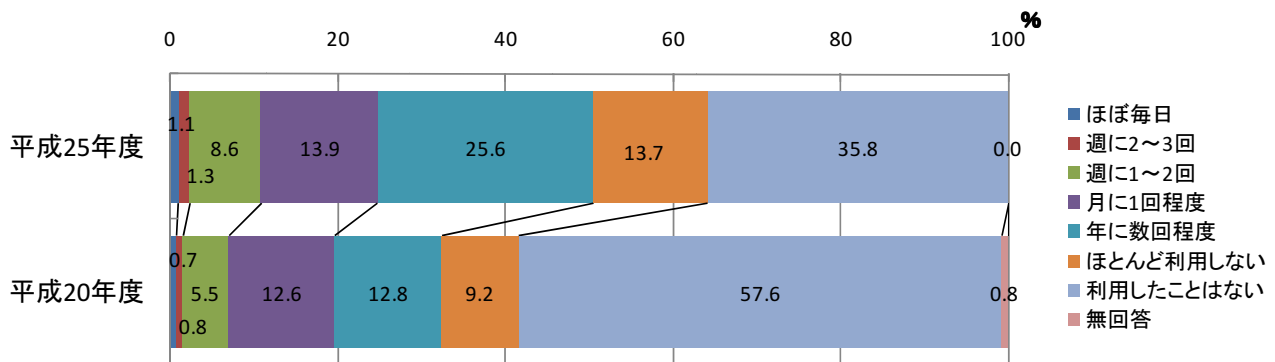


図1 Bーぐるの利用頻度

■Bーぐるマップと区報が利用されています

Bーぐるに関する情報のうち、最も利用率が高かったものは「Bーぐるマップ」の52.1%で、以下は「区報」、「区のホームページ」の順でした。「携帯電話の運行情報サービス」、「ケーブルテレビのBーぐる沿線情報番組」は5%未満の利用率でした（図2）。

Bーぐるに関してもっと知りたい情報は、「バスの運行情報（現在位置など）」が35.7%で第1位、以下「乗換や乗継に関する情報」、「隣接区のコミュニティバスとの接続などの情報」が20%台、「沿線の歴史文化資源・イベントの情報」、「沿線商店街や店舗の情報」、「バスの混雑状況」が10%台となっています。

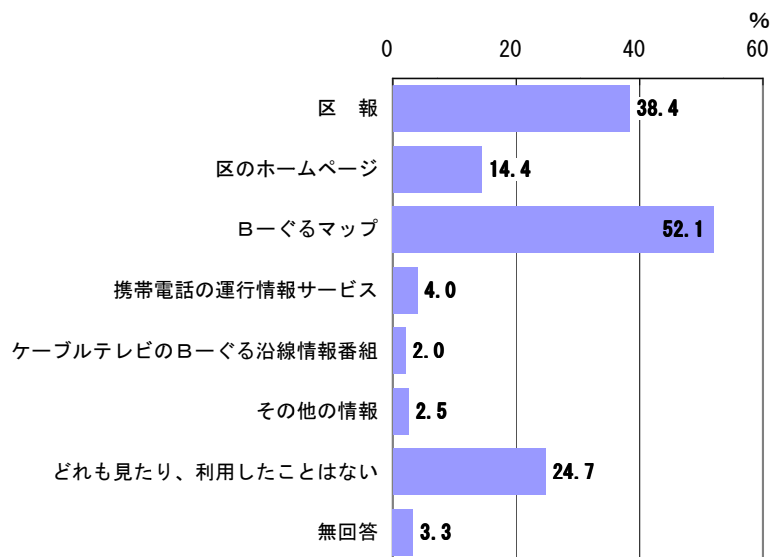


図2 見たり利用したことがある情報（複数回答）

■沿線協議会の認知度は9%にとどまっています

沿線協議会の認知度については、「会の目的やおおよその活動内容を知っている」が1.7%、「名前を見たり、聞いたことがある程度」が7.3%と、両者を合計しても沿線協議会の認知度は9.0%とかなり低く、「存在を知らなかった」が89.6%と大多数を占めています（図3）。

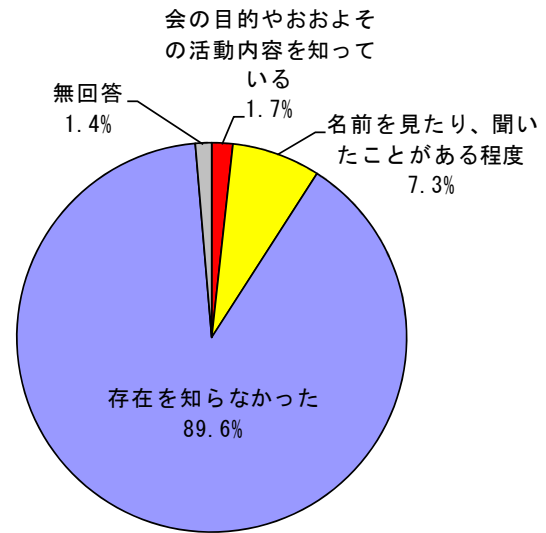


図3 沿線協議会の認知度

利用者の増加に向けた情報提供や新たな活動を視野に

アンケート結果の報告を受け、出席委員から「区では、何か具体的なアクションにつなげていくのか」との質問があり、「利用者を増やすために、区外の方の取り込みも考えたい。従来の情報媒体（区報、区のホームページ、Bーぐるマップ等）は主に区民や利用者向けであるので、今後は隣接区のコミバスとの連携やマスコミ対応等、区外や観光目的の利用者を取り込むための検討を行いたい。」と事務局が抱負を述べました。

公募委員の饗場委員からは企画会議の活動に関して、「平成23年度から2年間東京都の助成を受け実施した新しい公共の活動を一部引き継ぎ、25年度も跡見学園女子大学マネジメント学部芝原ゼミとの協働で、Bーぐる（千駄木・駒込ルート）で放送している沿線地域情報番組を3本制作することができた。沿線協議会に対する認知度や関心はまだ低

いので、こうした活動を通じて沿線協議会をPRしていきたい。皆様の積極的な協力や支援を賜りたい。」との報告がありました。

最後に元田会長が平成25年度を振り返り、「Bーぐるが運行を開始して間もなく丸7年になる。地方の自治体では、前年よりもコミュニティバスの利用者が高齢者を中心に増加している例が出てくるなど、コミュニティバスを取り巻く環境にも変化の兆しが見える。今回のアンケートの結果からも、Bーぐるでも情報提供やPR等、まだやるべきことはありそうだ。バスの安全運行という地道な事業を継続しつつ、新しい事業にも積極的に取り組んでいくことが大切。その意味でも沿線協議会、とくに企画会議の活動には今後も期待したい。」との総括があり、閉会しました。



編集後記

公募委員を中心に企画会議では、昨年度に引き続き沿線地域情報番組DVDを制作したそうです。予算のない中での活動は苦労も多かったらと思うと同時に、メンバーのBーぐるや沿線地域に対する熱い思いを感じました。

この一年、沿線協議会や企画会議の活動取材して、コミュニティバスは公共交通であると同時に、沿線地域のコミュニティを支える役割を担っているのだということに改めて気付かされました。

平成25年度はこれで終了ですが、来年度以降の沿線協議会の新しい取り組みに期待したいと思います。（N）